

---

# 『名探偵コナン ~暁への導き（リード）～』

真知歌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

IJのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『名探偵コナン～暁への導き（コード）～』

### 【コード】

Z0210Z

### 【作者名】

真知歌

### 【あらすじ】

歩美の見た不快な夢から始まる嫌な事件…組織の仕業なのか！？まさか帝丹小学校にまで事件の波が来るのは誰も思っていなかつた。「組織の仕業ならもう手遅れね、あの子達を救うことはできないわ…」

「バーコ…俺はまだ蘭に話さなきゃなんねえことがあんだよ…」

あの謎の女探偵も登場…!!

突如姿を現した赤井秀一…その想いは？

そして、遂にコナンの正体が蘭にバレてしまつ……！？更に魔の手が蘭にも伸びる…その時コナンがとつた行動とは…？「新一、ありがとつ」

大阪の高校生探偵服部平次も登場！「和葉、お前は俺の初恋の相手やで？」この言葉の本当の意味とは…？

絶対に見逃せない『名探偵コナン～暁への導き（リード）～』

少年探偵団たちがとつた行動…  
それは幸か不幸か…。

## 奇妙な少女（前書き）

またまた来ました真知歌です！

毎度ありがとうございます (\* \*)

今回はシンゴさんと畠山美さんのリクエストを交えて作らせていただきました！  
是非楽しんでください！  
感想まつてまーす（笑）

## 奇妙な少女

「ハア ハア ハア…」

現在午前8時半

快晴の空の下でこんな穏やかな日とは正反対に青ざめた表情でランセルを背負い駆ける一人の少女がいた

その少女は帝丹小学校へと入っていき自分の教室のドアを勢いよく開けるや否や思いつきり叫んだ

「助けて！…！」

教室にいたクラスメート達は当然意味不明な表情をしている

その内の4人は更に驚いていた

そして叫んだ少女はその4人の姿が目に入り4人の内の一人にこう言った

「どうしよう… 助けて、コナン君…！」

そう言われたコナンは田をぱちくづさせながら

「どうしたの歩美ちゃん？」

そう、朝からパニック状態の人物の正体は吉田歩美だった

「どうしたんです？歩美ちゃん」

「ちゃんと飯食ってきたか？顔色悪いぜ？」

同様に光彦や元太も心配する

「もしかしてなにか事件でもあったのかしら？」

歩美のただならぬ表情を見て軽い冗談でそう問う灰原  
だがまさかの返答だった

「うん！事件よ事件！大事件！！」

歩美の“事件”といつ言葉に思わず反応するコナン

「なに！？まさか殺人事件か！？」

## 嫌な予感

すると歩美は

「違うわよー。そんなんじゃなくともっと大変なのーー。」

口ナンと灰原の頭には一瞬嫌な予感がし互いに顔を見つめ合つたが  
次の歩美の発言に思わず田が点になる

「夢だよー。夢見たのー。口ナン君と哀ちゃんがキスしてる夢ーー。」

「くつ……？」

少し顔が赤らめる口ナンと灰原

「あ、歩美ちゃん？なぜそんな夢を見てしまったんでしょ？」「うか？」

光彦も田が点になり少々焦る

「分かんなにカズ、口ナン君と哀ちゃんが抱き合つてキスしてたの  
ーー。」

動搖してこるかと思えば徐々に怒り出す歩美

「大丈夫よ、そんな」と現実的にありえないから

セツ一言灰原が言つと口ナンは横田で睨む  
すると灰原は不気味に笑つ

「そっか、なあ～んだ、そつだよね…」

とこきなり笑顔になつた歩美  
「やつやらじの事件は解決したよつだ

すると担任の小林先生が教室に入つてくる  
クラスメート達は皆席につくつとする

そして椅子に座りながら灰原がコナンに向かげる

「悪夢はこれから嫌な事が待ち構えているサイン…」

「はあ？」

「私は何度見たことが…」

ボソッといつもく灰原をコナンは見つめる

「な～んてねつ」

コナンに向けて「冗談だとゆう顔をする灰原だがその表情は何処か不安でこいつぱいだった

(「こんな天氣のいい日に事件なんか起きないわよね…」)  
(ましてや組織だなんて… 考えすぎね…)

## 序章 PART・1

教室の窓から快晴の空を見上げ灰原はそう思った

「え～と今日は一時間日に国語のテストをします」

小林先生のその発言にクラスメート達は皆ブーイングだ

もちろん元太や光彦や歩美も

「酷すぎますよ予告もなしに～」

「そりだよ勉強する時間ないよ～」

「実力を試すテストです」

小林先生はワインクしながら階下の廊下に腰にブーイングが起きた

「んだよ、俺朝飯いっぱい食つちまつて眠いから寝ようと思つてたのによ～」

「元太君、それはちょっと違つたら気がするんですけど…」

やつしているといつの間にか朝の会終了のチャイムが鳴った

教室内では急いで勉強する者や最早諦めて遊んでいる者達がいた

そんな中で探偵団の三人は文句を言つていた

「 もお～「コナン君どう思つ?」

ふいに歩美がコナンへと問い合わせた

「 えつ？俺？…まあ～実力つてのも大事だしいんじゃねえか？」

「え～「コナン君も小林先生の味方なの？」

「えつ？味方つてゆうか…」

答えに詰まる「コナン」を三人は真っ直ぐに睨んでいた

「随分余裕なのね？まるで他人事ね？」

困つて「いる」コナンの後ろから灰原がからかいながらそいつ

## 序章 PART・2 黒い闇

そうしてこるづかに一時間目の授業開始のチャイムが鳴り響いた

「あーあ、やだな…」

「仕方ありませんね…」

「腹減つたな…」

探偵団の三人は仕方なく席につこうとした

…その時

コナンの教室の前を見たことのない40代くらいの男性が通りかかつた

「ん?」

コナンは新任か生徒の親かとも思つたが次の瞬間嫌な予感が脳裏を横切つた

(フフフッ…)

その男性は確かにコナンを見て不適な笑みを漏らした

(…?)

コナンは驚きその男性を強く睨んだ

男性は教室の前を過ぎざるに消えたがコナンの心の内は不安でいっぱいだった

その理由は以前、黒ずくめの男達の仲間コードネーム『アイリッシュ・ユ』と戦った時にコナンの指紋付きの粘土が盗まれていたことがありました。

そう…、3日前から行方不明のコナン愛用の蝶ネクタイ型スピーカー…

蝶ネクタイ型スピーカーの脱衣は基本的に着替える時、稀に出先で外すこともあるが大抵は毛利探偵事務所か阿笠博士の家だ

3日前の夜も記憶のうちでは阿笠邸で蝶ネクタイ型スピーカーを外したはず…だが今日になつても見つかっていない

蝶ネクタイ型スピーカーのほうは阿笠博士が作り直してくれてはいるがコナンの心では黒い闇が訪問しに来ていた

序章 PART・2 黒い闇（後書き）

前回と同じような手は使わないと思つたがコナンは不安にかられていた

（もしさまたあいつらの仕業だつたら… 今回はやべえぞ…、蝶ネクタイ型スピーーカーは確かに博士ん家で取つたはず…）

（それをあいつらがまた盗みに來たとしたら俺の居所やたぶん灰原の居所もバレちまつてる…）

（そして俺や灰原の正体までもが…）

今の今までコナンは蝶ネクタイ型スピーーカーを何処かでなくしきつと何処かに置いてあるだろう、もし誰かが拾つても不思議なネクタイを興味本意で持ち帰つたり又捨てたりするだろうと思つていたがその考えは一変し恐怖に陥つていた

## 闇への突入（前書き）

コナンは焦った様子で椅子から立ち上がり小林先生に告げる

「先生！俺体調悪いから帰るね！！」

小林先生が止める間もなく教室を出していく

「おい「コナン」！」

「するいですよ「コナン君」！」

「全然体調悪そうに見えないね」

元太や光彦、歩美は不思議に思ったがすぐに三人はどうせテストが嫌になつて仮病を使って帰つたのだろうと推理した

コナンのただ事ではないような表情を見た灰原は

「先生、私も体調が優れないから帰るわ」

「そ… そななの？ 気を付けてね…」

小林先生は灰原が釀し出すオーラに触れられずあつさりと帰宅を許した

「哀ちゃんまで行っちゃつたね」  
「灰原さんも仮病でしうか」

「せ、先生俺も腹の調子が悪いんで…」

「元太君！それはただの食べ過ぎです！」

元太も流れに乗つて帰るつとするがそこは光彦が強く突つ込んだ

## 闇への突入

「ちょっとー、ビーハしたのよ?」

不気味な男性の存在を知らない灰原はコナンの後を走つて追いかけ呼び掛けた

コナンは立ち止まり何かに気付いたように後ろを振り返り灰原にこう聞いた

「おめえ、やつき変な感じしなかつたか?」

「え? どうゆうこと?」

灰原に先程の事を言うのは戸惑つたがもし黒ずくめの男達の仕業なら一刻を争うと思いまだ言ってなかつた蝶ネクタイ型スピーカーのことも全てを灰原に話した

…つてことなんだ、もしあいつらの仕業で俺を狙つてるとしたらここにいるのは危険すぎる…」

それを聞いた灰原の顔は青ざめた

「そうね…あの子達を巻き込むのは避けなければならない」

「かといってあなただけが狙われているとも限らない、あなたの正体がバレたとしたら私の正体もバレているわ、そうしたら組織は血眼になつて私を見つけ出し私の周りの人間共々殺しに来るわ…」

「ああ……」

「ナンは『クリ』と睡を飲んだ

(蘭：)

そんな様子を見た灰原はもう一言告げた

「でも……もし組織の仕業ならもう手遅れね……」

「……」

「今頃私達の周りの人間を調べ尽くしている頃よ……そうなるとすればあの子達を救うことまできないわ……」

## 暁の想い

いつになく弱気な灰原…

そんな灰原に近寄りコナンは灰原の胸ぐらを掴み物凄い剣幕で「いつ  
言った

「ぜつてえに殺さねえ……あいつらも…蘭も…　おめえも…  
必ず俺が守つてみせる…殺されてたまるか…！」

灰原は正直驚いた

だがこんな時に少々ドキッとした自分が許せなかつた

（何考えての私…）

（『逃げるんじゃねえ…、自分の運命から逃げんじゃねえ』）

あの時のコナンの言葉が蘇る

「とりあえず博士ん家に行くぞ」

「ええ」

コナンに促され灰原も阿笠邸へと向かつた

その頃帝丹高校では

「ねえねえ、見て蘭！」

そう言いながら園子はストラップを見せる

「かわいい～！なにそれ？」

「真さんとお揃いなの～」

「へえ～上手くいってるんだ！」

「お陰様でね！」

「そつかー良かつたね！」

園子はにやけ顔から真顔になり蘭に尋ねた

「蘭は？」

「えつ？」

「新一君と何かお揃いの物ないの？」

「私？私は…別に恋人同士ってわけじゃないし…」

「ええ～！…？まさかまだ返事してないわけ？」

園子の書いた返事とは以前ロンドンで新一に贈られた時の返事だ

「まつたく～早くしないこと誰かにどうやれやけいわよー。なこまこ、すぐ返事しなやこ」

やひゆひと半ば強引に蘭の携帯を取り上げて新一へと発信する

## 仕掛けの罠

阿笠邸

突然帰ってきたコナンと灰原に驚いた博士

コナンは博士に一部始終を打ち明けた

今博士はコナンに頼まれた組織の仲間、シャロンすなわちベルモットの情報をファンに紛れ込みパソコンで検索している

そんな中コナンと灰原は一人で考え込んでいた

すると新一用の携帯が鳴り響いた

着信画面を見るとそこには“蘭”と表示されていた

何かあったのかとコナンは急いで電話に出た

「もしもし？蘭か？」

博士に再度至急で作つてもらつた蝶ネクタイ型スピーカーを手にとりながら

すると電話口の相手は蘭ではなかつた

『私、園子！』

「園子…？蘭に何かあったのか…？」

『セウセウ・大ニコースよ！　はい蘭』

そう言つと園子は携帯を蘭に返す

『もおー園子つたらー　あつごめんね新一…』

会話のやつ取りから特に何も事件のない様子が伺えたコナンは

「わりいな、蘭…ちょっと今事件が立て込んでて、また電話するー。」

やつとコナンは電話を切ってしまった

「そんなんに冷たくしていいの？」

流石に見兼ねた灰原が口を挟んだ

「…今はそれどひじやねえ」

「……」

するとコナンは再び顎に手を添えながら真剣な眼差しで考え込み出した

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0210z/>

『名探偵コナン～暁への導き（リード）～』

2011年12月1日20時51分発行